

多摩川流域環境保全データベース検証用 WebGis 構築に関する調査研究

2011年

宮林 茂幸
多摩川源流研究所運営委員長

共同研究者：中村 文明（多摩川源流研究所 所長）
尾高 重徳（株式会社 国土地図）

助成調査・試験研究の完了報告書
〔最終年度〕

〔学術研究用〕

2011年3月30日

公益財団法人 とうきゅう環境財団
会 長 西 本 定 保 様

住 所
山梨県小菅村4383

調査・試験研究者

氏 名 多摩川源流研究所 宮林 茂幸 ㊞

2009年 1月 14日付第2009-22 号

調査・試験研究課題

『多摩川流域環境保全データベース検証用WebGIS構築に関する調査・研究』

はじめに

今回の事業は、多摩川流域を対象に、WEBGISを活用して、自然環境、地域文化、市民活動など多様な分野の基礎データの収集と蓄積、その情報共有のプラットフォームを構築するものである。

多摩川は、周辺住民の自然保護の粘り強い取り組みと相まって都市河川の中にあって、豊かな自然環境が残されており、源流から河口・海までの領域に渡って様々な活動が日常的に展開されている。多摩川に展開される様々な取り組みの時間的、空間的、距離的な障害を克服して自然環境保全に関するデータなどの収集・蓄積と情報の共有化を図り、最も厳しい社会経済環境のもとにある源流域へ新しい光を当てると共に持続可能な流域管理に資することを目指している。

小菅村の源流元気再生事業を契機に

ところで、小菅村の源流元気再生事業の柱の一つである源流ミュージアム構想がこの事業のきっかけになっている。地球温暖化が進行する中、源流域の水資源や森林資源に関して、その価値や役割は益々重要になっており、こうした源流の資源は流域社会共有の宝であり、財産であるが、こうした役割や情報を流域全体にして有効に発信できていない。源流域に関する情報を可視化するとともに、リアルタイムで源流の活動や情報が流域へ伝達できる仕組みづくりを検討する計画である。

ところで、多摩川の自然環境を守る取り組みは後でもふれるが、全国に先駆けた数々の先進事例があるが、これらの実績や成果は自然発生的に生まれたものではない。多摩川の自然が破壊されていくことに対する危惧や反発から、自然保護への市民の立ち上がりがある。今我々が水質調査の活動データを集約しているが、それは多摩川の自然保護の成果を正確に反映した数値を科学的なデータで確認できるからである。

活動実績とデータの背後を探る

であるならば、この40年間の多摩川における市民活動の調査・研究なしに水質調査等の数値に関する正確な理解や意味合いを解明することは出来ないであろう。大都会のすぐ近くにありながら、多摩川の自然が比較的良好に保たれているのは、多摩川の自然環境を改善させてきた様々な取り組みとそれを担った人々の苦闘の歴史があったからにほかならない。そこで、まずはじめに多摩川における市民活動の歴史を振り返る。市民運動の歴史的な研究を地道に行い、多摩川の自然環境保全とその改善の取り組みに関するデータを提供してこそ、この事業は、成功するものと確信する。

1 調査・研究の目的について

この取り組みは、多摩川流域の自然環境の保全活動に関する様々なセクターの活動の情報を共有し、多摩川流域のよりよい自然環境を維持・改善するのに必要となる情報管理と状況の客観的・定量的判断の支援ツールとして、標準的な地図情報を装備した多摩川流域の環境保全活動に関するデータベース化の検証用WebGIS構築に関する調査研究を行うことを目的とする。多摩川における自然、歴史、文化に関する調査・研究や市民レベルの自然環境の保全活動は、全国に先駆けた数々の業績をあげてきている。多摩川の自然を守る会の発足、多摩川の自然破壊に反対する自然保護活動、多摩川クリーン作戦や多摩川生き物観察会など住民運動の高揚、河川環境管理計画の策定、多摩川八景の選定、多摩川流域懇談会の設立など事例は数多い。さらに、河川管理者と市民団体がパートナーシップを確立して多摩川水系河川整備計画を策定し、平成16年には、源流から河口までの市民や市民団体が参加する多摩川流域ネットワークも結成されるなど、多摩川のよりよい自然環境を保全するための参加と連携と協働の活動が展開されている。

多摩川の自然環境保全活動や環境教育のより効果的な推進に、情報の共有は欠かせない。個々の団体による情報発信やセミナー、シンポジウムの開催など活発に取り組みられているが、流域全体を視野に入れた地理的空間的な情報の共有と交換の試みは未開発である。このWebGISを活用してとうきゅう環境財団のこれまでの研究成果を地理情報として発信したり、水質調査活動の展開や水辺の楽校の活動を地理情報に反映させることが可能となる。

特に多摩川源流域は極めて厳しい社会経済環境のもとにあるが、源流大学が活躍するなど新しい動きもあり、情報の共有や源流の可視化により、源流域の資源を活用した地域作りへの支援も期待できる。また、シカや熊による被害も年々拡大している。こうした情報をリアルタイムで流域市民に伝えることも可能となる。平成20年度から21年度の第一期に置いては、後述するように幾つかの成果をあげることができた。いよいよその成果を育て順調に成長させていきたい。では、はじめにで触れたように多摩川と流域市民との関わりについて考察する。

3 調査・研究の実施内容

調査・試験研究の計画

2010年度は、多摩川流域を対象に、WEBGISを活用して、自然環境、地域文化、市民活動など多様な分野の基礎データの収集と蓄積、その情報共有のプラットフォームを構築するものであるが、どんな目的でどんな内容をデータ化するかなど、この取り組み

の基本方向を検討するための検討会及び入力するための技術講習会を3回開催した。その結果、具体的な取り組みに関しては、以下の4点を中心に取り組むことになった。

1) 多摩川一斉水質調査の場所と数値を地図に落とす

2009年度は、流域全体の397カ所の測定箇所データを入力したが、検討会において、それ自体は多摩川の水質の現状を理解する上で貴重なデータであるが、その水質が10年前はどんな状態であり、その後どのように変化しているのかが分かると大変よいとの指摘を受け、1999年の89カ所のデータを入力した。比較対照した一覧表を見れば、次のようなことが読み取れる。

多摩川流域の水質変化の傾向について

マップでは1999年と2009年に測定したCODの値をそれぞれ0～3mgO/L未満（青色）、3～6mgO/L未満（黄色）、6mgO/L以上（赤色）の3段階に分けて表示している。このうち、最もCODの値が高い6mgO/L以上（赤色）の地点の割合は、1999年には全体の41.6%を占めていたが、2009年は全体の11.6%と減少している。一方、最もCODの値が低い0～3mgO/L未満（青色）の地点の割合は1999年には全体の16.8%だったのに対し、2009年は全体の54.9%と増加している。

測定地点、測定箇所数が異なるので単純に比較はできないが、10年間で水質が大きく改善している傾向がうかがえる。水質は、多摩川の自然度、環境の良好度を示すメルクマールといえるが、下記の表に示されているように、10年を-spanしてみると一歩一歩ではあるが、多摩川の水質が改善されている事実がよく分かる。

水質変化の比較

COD	1999年			2009年		
	測定箇所数	全体に対する割合(%)		測定箇所数	全体に対する割合(%)	
		計算	改め		計算	改め
0～3mgO/L未満	15	16.85393258	16.8	218	54.91183879	54.9
3～6mgO/L未満	37	41.57303371	41.6	133	33.50125945	33.5
6mgO/L以上	37	41.57303371	41.6	46	11.58690176	11.6
計	89		100.0	397		100.0

2) とうきゅう環境浄化財団の研究成果の可視化を図る

第一期で121件を可視化

とうきゅう環境財団は、1974年に設立されて以来、36年間にわたり、多摩川及び流域の環境浄化保全に関する調査研究活動に対して研究助成を実施し、この間452件の助成が行われ、うち401件の研究成果が完成している。その研究成果は、あらゆる分野にわたるものであり、きわめて貴重な成果が積み重ねられてきている。こうした成果を社会に広く還元し、多摩川流域の環境浄化保全に役立てようというのが、研究成果の可視化の狙いである。第一期の取り組みでは、学術研究（1995年～2009年、121件）と②一般研究（1995年～2009年、101件）をそれぞれ可視化することが出来た。

研究成果を流域に記すこと

実際に研究者が取り組んだテーマと場所をGISに落としてみると、多摩川の上流、中流、下流にどのように配置されているか、どこに集中しているかが一目瞭然である。テーマの目的や狙いを画面上に記すと、研究者の意図や意気込みが違った角度から読み取れる。画面が込みすぎてやや見づらい点は、今後の改善点であるが、研究成果が多摩川流域の実際の地点に示されることは、研究者にとっても喜ばしいことだろう。

可視化したとうきゅう環境財団研究成果一覧表

①学術研究（1995年～2009年、121件）

年	番号	研究課題	代表研究者
1995年	165	「多摩川の漁撈文化史」に関する研究	安斎忠雄
1995年	166	多摩川流域における両生・爬虫類の分布要因の分析に関する研究	森口 一
1995年	167	多摩川河口域の底質中での石油化学物質の微生物による分解浄化に関する研究	村上昭彦
1995年	168	アウトドア活動が渓流水質(主にLAS)に与える影響の評価	高田秀重
1995年	169	多摩川水系の底質および水棲生物中のダイオキシンの分布に関する研究	小野寺祐夫
1995年	170	衛星による都市化の進展に伴う気候環境の変化に関する研究－多摩川中流部における都市について－	山下脩二
1995年	171	多摩川支川群の類型化に関する研究	宮村 忠
1996年	172	多摩川流域における魚類民俗学に関する研究	秋篠宮文仁
1996年	173	多摩川流域における陸上動物の生態学的研究(2)自然指標として昆虫類(蝶・蛾・甲虫・アリ類)	三島次郎
1996年	174	多摩川中・上流涵養域の渓流水中無機態窒素濃度の地理的分布と窒素循環	楊 宗興

1996年	175	奥多摩湖に発生する Microcystis 属ラン藻のアイソザイムを用いた同定および毒性の余地に関する研究	原 慶明
1996年	176	多摩川下流域底泥における硫酸還元菌の核散ブローブによる解析とその硫酸還元速度との関係	瀧井 進
1996年	177	大気降水物による多摩川流域への汚染有機物の負荷に関する研究	森永茂生
1996年	178	多摩川河川水の細胞毒性・遺伝毒性の調査	内海英雄
1996年	179	多摩川集水域におけるツキノワグマの生態に関する研究	山崎晃司
1996年	180	多摩川水系におけるニホンザルの分布と変遷 ー群の土地利用ー	村松正敏・細田紀子
1997年	181	多摩川上流の谷口における山風の吹送と市街地の大気環境との対応	佐藤典人
1997年	182	神奈川県から多摩川流域・東京湾へ流入する排水量の変遷	原 美登里
1997年	183	多摩川河川水の発泡特性の分布と変化に関する研究 ー20年前との比較ー	安部喜也
1997年	184	多摩川流域における水生植物の水質浄化機能の評価とその強化手法	細見正明
1997年	185	多摩川底質中に含まれる鉄の化学状態を指標とした環境特性評価に関する研究	松尾基之
1997年	186	奥多摩湖における浮遊微生物群集の動態と物質循環に果たす役割	占部城太郎
1997年	187	多摩川水系のトビケラ相とその分布	片桐一正
1997年	188	窒素安定同位体比法を用いた多摩川の窒素汚染と浄化作用に関する研究	熊澤喜久雄
1997年	189	多摩川上流域の肉食菌類の分布調査 ー日本で再発見されたワムシ捕食性水生菌 Zoophagus tentaculum の光学、及び電子顕微鏡的研究	犀川正稔
1998年	190	カワラノギクの個体群と生育環境の復元についての研究	井上健
1998年	191	多摩川における増水が生物の分布に及ぼす影響(フラッシュ効果)についての研究	亀山章
1998年	192	多摩川全域における溶存有機化合物の蛍光分析と構造変化に関する研究	石井忠浩
1998年	193	多摩川水源林の防火帯に発達する草本植物群落の種子繁殖における訪花昆虫の役割	鈴木和雄
1998年	194	多摩川上・中・下流および河口における底泥中の石油系炭化水素の微生物分解浄化	小林晶子
1998年	195	多摩川流水域における新テレメトリーシステムを用いたアナグマの環境選択	神崎伸夫
1998年	196	多摩川上流域における付着層形成過程の解析	森川和子
1998年	197	多摩川河川敷のカビ臭産生原因としての河床付着微生物の研究	山本谿子
1999年	198	多摩川河口域における水鳥相の解析ー特に東京湾の干潟環境との対応について	桑原和之
1999年	199	多摩川人工わんどの変遷と生息環境の評価および保全に関する研究	玉井信行
1999年	200	奥多摩水系(多摩川・秋川)における瀬と淵の水利及び環境特性に関する研究	池田駿介
1999年	201	多摩川の川床に分布する付着藻類の生態と意義に関する研究	渡辺泰徳

1999年	202	多摩川および周辺水域に棲息するカワウの有害物質蓄積とその影響評価に関する環境化学的研究	田辺信介
1999年	203	川崎・多摩川エコミュージアム構想をモデルとした市民・行政・企業・専門家におけるパートナーシップ型地域づくりに関する調査研究	進士五十八
1999年	204	多摩川最上流域における水質形成に及ぼす立地環境の影響の解明—環境変化に対する水源水質の予測モデル構築にむけて—	小野寺真一
1999年	205	多摩川流域に生息する蝶類の遺伝的多用性とその保護に関する研究	小原嘉明
2000年	206	武蔵野ローム層における降雨浸透機構および物質移動特性に関する研究	唐 常源
2000年	207	多摩川流域河川に生育する水草のイオン吸収機構の細胞分子生物学的研究	福原敏行
2000年	208	多摩川流域における細胞毒性変動の調査、解析	酒井康行
2000年	209	多摩川河口・下流域の魚介類内分泌攪乱物質汚染に関する研究	大槻 晃
2000年	210	多摩川における伏流機構と水質浄化機能評価に関する研究	山田啓一
2000年	211	多摩川上流域の水源林の保水能力の推定に関する研究	市川 新
2000年	212	多摩川の流況調査に関する研究—羽村堰越流量と水利用形態の変更を中心に— した流況調査—	宮村 忠
2000年	213	多摩川上流域の沢水組成に及ぼす大気降水の影響	鶴見 実
2001年	214	多摩川およびその流域の都市化と環境保全	中井達郎
2001年	215	多摩川水源域に生育する草本植物集団の遺伝的組成に及ぼす集団孤立化の定量的評価	大原 雅
2001年	216	多摩川流域の土地利用形態が物質循環に与える影響に関する研究—これからの丘陵地域の環境保全—	安富六郎
2001年	217	希土類元素群からみた多摩川水系の化学的評価	赤木 右
2001年	218	多摩川の河岸土、底土、河川水の内分泌攪乱物質分解能とその強化に関する研究	大森俊雄
2001年	219	世田谷・多摩川における市民ボランティア、学生、行政のパートナーシップ型の河川舟運振興策と癒しの川づくりのための実践的な調査研究	長野正孝
2001年	220	多摩川中～上流域の森林土壌からN ₂ O放出速度の地理的分布と窒素循環	土器屋由紀子
2001年	221	生物保全のコリドーとしての玉川上水の動植物の調査	高槻成紀
2001年	222	水源林地帯を主体とした多摩川流域の解析評価と環境管理に関する調査研究	田畑貞寿
2001年	223	多摩川流域河川堆積物および土壌有機物中の硫黄、セレンの挙動	高野穆一郎
2001年	224	多摩川の絶滅危惧植物の回復を目指した復元生態学的手法の開発	小堀洋美
2001年	225	多摩川河川敷におけるニセアカシアの分布拡大と生育環境に関する調査研究	池谷奉文
2002年	226	多摩川水系の貝類からみた自然環境の現状把握と保全に関する研究	黒住耐二
2002年	227	高精度測定法による多摩川水系の水収支・物質収支の動態把握と河川水質形成機構の解明	大森博雄

2002年	228	多摩川流域における蛍光増白剤の分布と挙動	高田秀重
2002年	229	内分泌攪乱物質による多摩川流域の土壤動物汚染の解明:環形動物貧毛綱「ミミズ」を指標に用いた解析	蒲生 忍
2002年	230	酸化チタン光触媒による多摩川の水中の外因性内分泌攪乱化学物質の分解に関する研究	藤嶋 昭
2003年	231	多摩川水系における水質の着色成分の状況と除去対策の検討	鈴木昌治
2003年	232	多摩川中・下流部における大縮刷地図表現による古代景観の復元的研究	大石堪山
2003年	233	多摩川河川敷におけるタコノアシの現況、生育特性、保全対策について	瀬戸口浩彰
2003年	234	多摩川におけるエビ・カニ類の遡上に配慮した魚道の研究	安田陽一
2003年	235	多摩川源流域におけるハナバチを中心とした生物間相互作用の解明	樋口広芳
2003年	236	多摩川河川敷の河跡地における植物群落の生育立地と多様性	星野義延
2003年	237	多摩川流域での窒素飽和の実態解明:その分布と解析	楊 宗興
2003年	238	GISを用いた多摩川・鶴見川流域における水循環モデルの構築	原美登里
2003年	239	GISを用いた流域分類と流出現象のモデル化に関する研究—多摩川流域丘陵地への適用—	小口 高
2004年	240	多摩川中、下流における縄文時代以降の環境変遷と現環境の成立に関わる研究	杉浦重夫
2004年	241	多摩川上流丹波川流域における河川水質形成に及ぼす雪の効果	鈴木啓介
2004年	242	多摩川流域における明治前期の植生図化と植生景観の研究	原田 洋
2004年	243	多摩川流域の丘陵地における物質動態と環境保全システムの構築	三原真智人
2004年	244	多摩川河川敷の植生遷移における生存戦略としてのアレロパシーの関与	渡邊 泉
2004年	245	多摩川中上流域におけるシカによる植生の破壊と土壌浸食についての調査	高槻成紀
2004年	246	多摩川河口域の干潟における底生動物相の解明と人為的影響の評価—環境浄化に貢献する底生動物の釣り餌としての採捕について	西栄二郎
2004年	247	多摩川水系飲用水の生物作用の調査:遺伝子情報の不安定化と免疫機能の攪乱に関する水質検査	喜多和子
2004年	248	多摩川に接続する農業水路の魚類の生息状況とそれを規定する要因について	千賀裕太郎
2005年	249	多摩川源流域の山岳信仰と自然保護に関する調査研究	長野 覺
2005年	250	多摩川底質中の硫酸還元菌による硫化鉄化合物生成と悪臭低減に関する研究	松尾基之
2005年	251	多摩川河川敷におけるマツヨイグサ属植物の交替現象について—植物相の変化の要因と影響の解明—	倉本 宣
2005年	252	多摩川水系の貝類からみたクリプトスポリジウム汚染実態と感染防止対策に関する調査・実験研究	笹原武志
2005年	253	多摩川水系の底質におけるポリクロロジベンゾチオフェンの分布及びその残留性の評価	中井智司

2005年	254	多摩川水系における底生動物と水文・水理特性の影響に関する研究	土屋十圀
2005年	255	多摩川の河川敷環境がコリドーとして山間部と市街地に孤立したアカネズミ個体群をつないでいる可能性に関する保全遺伝生態学的研究	小原嘉明
2005年	256	多摩川及び東京湾から外洋域における難分解性有機汚染物質の分布と運命予測	藤原祺多夫
2005年	257	多摩川の水質環境の変化に対応した新たな微生物・化学指標による現状把握と指標評価	小堀洋美
2006年	258	多摩川集水域におけるツキノワグマの土地利用についての研究—主としてオスおよび若齢固体の移動分散様式について—	山崎 晃司
2006年	259	大気—河川—内湾系連成モデルに基づく多摩川河口域の物質循環解析—東京湾が多摩川の水質環境に与える影響に着目して	八木 宏
2006年	260	テフクロノロジーを用いた多摩川流域における鮮新-更新世の古環境復元	田村 糸子
2006年	261	多摩川中流域における河川敷植生の復元と管理についての研究	一澤 麻子
2006年	262	多摩川における早瀬の景観的特徴とその水理環境に関する研究	知花 武佳
2006年	263	多摩川水系飲用水に関する市民コーディネータ育成アカデミーの設立:生物作用水質モニターと水のヒト生命科学教育システムの構築	鈴木 信夫
2006年	264	生態系維持基盤としての流域特性と水循環特性に関する研究—スギ・ヒノキ放置林伐採前後における比較—	佐倉 保夫
2007年	265	多摩川河川水に含まれる内分泌攪乱物質の水生植物による吸収・分解機構に関する研究	池田 駿介
2007年	266	多摩川河口干潟における硝化・脱窒に関する研究	浦川 秀敏
2007年	267	多摩川流域における窒素循環の把握および地目連鎖による浄化能の解析	木村園子 ドロテア
2007年	268	粒状有機物から見た多摩川の生態学的連続性の評価	古米 弘明
2007年	269	多摩川源流・鶴川地域の伝統的畑作農耕をめぐる生物文化多様性の保全	木俣 美樹男
2007年	270	多摩川の植生と植生図—30年間の変化—	中村 幸人
2008年	271	多摩川で回復したカジカ個体群の系統分類に関する研究	糸井 史朗
2008年	272	多摩川流域における工業的土地利用の変化・機能転換と流域環境整備の課題	松原 宏
2008年	273	多摩川沿川地域におけるオープンスペースと建築景観の実態に関する調査研究	進士 五十八
2008年	274	歴史的・生態的価値を重視した水辺都市の再生に関する研究	陣内 秀信
2008年	275	多摩川水系飲用水に関する市民コーディネータ育成アカデミーの設立	鈴木 信夫
2008年	276	多摩川における雨天時に流出する粒状有機物の起源と特性の評価	春日 郁朗
2008年	277	多摩川水系における落葉食河川底生動物の種多様性に及ぼす河川環境要因の影響解析	加賀谷 隆
2008年	278	多摩川水系に侵入した外来動物『フロリダマミズヨコエビ』の分布・拡散の現状と生態系への影響予測	倉西 良一

2009年	279	多摩川における生態系多様性の評価: 寄生虫を指標とし、地理情報システムを活用した方法の開発	杉山 広
2009年	280	湧水温、湧出量とシリカ濃度に基づく涵養・湧出機構の推定—東京都日野市の例—	松山 洋
2009年	281	多摩川源流域における下水道整備が奥多摩湖の水質問題に及ぼす影響に関する研究	寶 馨
2009年	282	多摩川河川水の下水処理水臭の原因としてのアルデヒド系臭気	浦瀬 太郎
2009年	283	多摩川上流・中流域の河川堆積物と河川水(懸濁態および溶存態)の有害重金属元素分布	加藤 泰浩
2009年	284	多摩川河川敷及び流域緑地における草地管理と草党性小動物の生息規定要因の関係把握	勝野 武彦
2009年	285	明治・大正期の別邸敷地選定にみる国分寺崖線の風景文化論的研究	笠原 知子

②一般研究（1995年～2009年、101件）の一覧表

年	番号	研究課題	代表研究者
1995年	88	市民の手による浅川、矢川、野川の水質合同調査と水質表現の研究	大竹千代子
1995年	89	多摩川における水面景観の変化に関する調査研究	島村勇二
1995年	90	多摩川支流の考古学的遺跡における石器石材の獲得と活用について—野川、仙川、大栗川、乞田川流域を中心として—	比田井民子
1995年	91	多摩川のヤナギ林の発達と衰退を通して河川環境を考える	秋山好則
1995年	92	多摩川における散乱ごみの状況とその対策に関する検討	鈴木徹也
1995年	93	多摩川流域および周辺地域の文化的遺産としての古井戸に関する研究	角田清美
1995年	94	多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究	久保田繁男
1995年	95	伊奈石の採石・加工と多摩川流域の流通についての研究	十菱駿武
1996年	96	水草から見た矢川の保全について—矢川における水生植物の年間変化と分布状況—	高橋福子
1996年	97	多摩川環境情報提供システムを活用した小中学校の授業における環境教育の方法	棚橋 乾
1996年	98	明治期の多摩川流域におけるビール業の研究	牛米 努
1996年	99	多摩川の河川清掃についての歴史と一斉清掃の実施による参加者の意識と散乱ゴミの実態についての調査	小島あずさ
1996年	100	多摩川中流域における地学教材の研究	清水政義
1996年	101	多摩川の洗剤汚染調査—第1部 多摩川、三沢川の水質調査・第2部五反田川	笹川忠夫

		の水質調査ー	
1996年	102	野川における児童(親子)の水遊び場・川遊び行動についての実態調査	尾辻義和
1996年	103	現地観測に基づく日野市の水環境保全に関する水文学的研究	山本由美子
1997年	104	多摩川水系のムカシトンボの分布と生態	大森武昭
1997年	105	多摩川中流域に分布する上総層群の古環境と水河性海水準変動の教材化	藤井英一
1997年	106	魚の病気と水質データに見る平井川の汚染	布谷和代
1997年	107	多摩川における青少年のあそびと環境教育の研究 一次世代の多摩川の守り手を育てるー	千葉勝吾
1998年	108	玉川上水系の用水の地域に果たした役割に関する調査ー砂川用水の水利用を中心にー	小坂克信
1998年	109	多摩丘陵から湧出する地下水の研究ー1. 生田緑地・早野・片倉の湧水の水質調査 2. 生田緑地の湧水とその流路の水質調査ー	及川利男
1998年	110	多摩川中流域における神社の境内の樹木の研究ー特に樹種構成とその配置についてー	秋山好則
1998年	111	国分寺崖線の総合的環境保全のための市民提案型広域行政施策に関する調査・研究	金子博
1998年	112	住民に提供するための多摩川流域の植物写真画像システム作成に関する研究	大川ち津る
1998年	113	条里遺構の分布を手掛かりとする多摩川流域の古代における水田景観の研究	菅野雪雄
1999年	114	多摩川流域及び多摩地域が抱える自然環境保全(河川、水路、丘陵等)の課題と住民活動の実態調査	榎本正邦
1999年	115	多摩川源流域における支流・沢・尾根等の名称とその由来に関する調査研究	中村文明
1999年	116	言語表現からみ多摩川のイメージ構造解析に関する研究	小早川智明
1999年	117	玉川上水の維持管理技術と美観形成に関する研究	榮森康治郎
1999年	118	多摩川の支流平井川における湧水と雑排水流入状況の住民による調査と水環境との関連性の検討	小山睦子
2000年	119	多摩川をモデルとした「河川環境」の保全に関する住民参加型の手法、制度についての調査・研究	山道省三
2000年	120	多摩川上支流域の土壌生態学的比較に関する研究	福田 直
2000年	121	多摩川中流域の「府中用水」に関する調査研究	島村勇二
2000年	122	溪間工が河床形態(瀬・淵構造)に及ぼす影響と溪流魚類の生息に関する研究	山下 晃
2000年	123	多摩川における環境体験とインターネットを活用したコミュニケーションに関する調査研究	荒木 稔
2000年	124	多摩川における川魚漁のあゆみと遊漁(釣り等)	笹川耕太郎
2000年	125	多摩川流域の段丘形成と考古学的遺跡の立地環境	比田井民子
2000年	126	多摩地域におけるカンアオイ類の分布・生態と保護に関する地生態学的研究	小泉武栄

2000年	127	多摩川流域のオオタカの生息状況の実態調査とその保護策に関する調査・研究	尾崎 洋
2001年	128	多摩川最上流域における斜面崩壊の発生機構	林 誠
2001年	129	多摩川の洪水と環境変動－近世多摩川洪水史と完新世段丘－	増渕和夫
2001年	130	多摩川下流域における神社の境内の樹木の研究－特に境内の樹種構成とその配置について	秋山好則
2001年	131	秋川上流域におけるナガレタゴガエルの生態学・発生学的研究とその棲息環境の保全について	三輪時男
2002年	132	環境教育、特にフィールドマナー（野外活動における倫理）の視点から捉えた多摩川の保全に関する研究	君塚芳輝
2002年	133	多摩川中流部（本流）における子どもの川遊びと水辺行動についての実態調査	上田大志
2002年	134	市民のための多摩川環境情報提供システムとその活用のあり方に関する調査研究	鈴木聖子
2002年	135	住民の眼で見つけた多摩川の30年：蓄積データ解析による自然の変遷と自然観の変化についての研究	柴田隆行
2002年	136	多摩川の源流に位置する奥多摩御前山における自然水とし尿の調査研究	山本久子
2002年	137	地質野外実習地としての多摩川中流域および狭山丘陵に分布する上総層群の露頭の現状とそれに基づく教材開発	馬場勝良
2002年	138	多摩川流域の石垣調査	岡崎 学
2002年	139	多摩川源流部の淵・滝・沢・尾根等の地名とその由来に関する調査研究	中村文明
2003年	140	多摩川流域と他流域の古井戸についての比較研究	角田清美
2003年	141	多摩川の自然を生かした教材化の研究－小学校「総合的な学習の時間」を通して－	千田文子
2003年	142	カワラノギクの保護・育成のための実践的調査研究	山田半三郎
2003年	143	多摩川流域におけるムササビの環境選択に関する研究	岡崎弘幸
2003年	144	「水みちマップ」をつくるための調査研究と井戸にみる多摩市の昔の暮らし	森岡淳子
2003年	145	用水を総合的な学習に生かす一日野の用水を例として－	小坂克信
2004年	146	檜原村三頭山「都民の森」公園の施設利用状況調査と自然公園の適正利用に関する研究	青木賢人
2004年	147	多摩丘陵に棲息する生き物の暮らしに学ぶ環境教育教材の研究開発	品田 穰
2004年	148	多摩川をめぐる住民運動史に関する調査研究	守田 優
2004年	149	多摩川日野用水堰周辺環境整備後の遷移調査	保坂幸尚
2004年	150	南浅川流域のヒガシカワトンボ生活史にみられる気候温暖化の影響	田口正男
2004年	151	多摩川ニヶ領用水から取水した水田における稲の生育に関する生理生態学的研究	安藤秀俊
2004年	152	ニヶ領用水取入口に関する史的考察	赤澤 寛

2004年	153	多摩川河岸を汚染するプラスチック・ゴミの調査研究、主にレジンペレットの起源とその影響について	山本洋司
2005年	154	多摩川河口干潟におけるトビハゼの生息環境に関する調査研究—泥質干潟との関連性について	五明美智男
2005年	155	秋川上流域におけるナガレタゴガエルの生命表の作成、及び、水位と流下行動の相関関係について	三輪時男
2005年	156	多摩川源流部の沢・尾根・淵・滝・小字等の地名と由来に関する調査研究—奥多摩編—	中村文明
2005年	157	多摩川流域の都市公園におけるトンボ相に関する調査	山内唯志
2005年	158	多摩川上流域における開発と水害	増淵和夫
2005年	159	浅川産ハチオウジゾウを使った体験学習のための基礎的研究と実践	馬場勝良
2005年	160	武蔵野台地南部の水利用・水配分に関する教材化のための基礎研究	小坂克信
2005年	161	多摩川源流地域における狩猟文化史に関する研究	井村礼恵
2005年	162	多摩川河床に発達する“牛群地形”の形成と保護に関する研究	徳竹真人
2006年	163	森林生態系における動物が植物の種子散布過程に果たす役割に関する研究—主に中、大型食肉類を中心とした他の生物種との生物間相互作用について—	小池 伸介
2006年	164	東京都の湧水等に出現する地下水生生物の調査	篠田 授樹
2006年	165	多摩川中流域の水環境を題材としたプログラム開発と市民による学校支援体制システムの研究	杉山 典子
2006年	166	多摩川中流のかつての田園地域における希少植物の生育確認調査	星野 順子
2006年	167	中央線沿線地域の雨水循環的活用可能性研究調査	黒岩 哲彦
2006年	168	野川流域における湧水保全モデルの開発に関する計画論的研究	神谷 博
2006年	169	多摩川における地区河川環境モニタリング手法とその運用に係る人材育成に関する研究	横山十四男
2007年	170	多摩川流域におけるトンボ類の生息場所の構造に関する研究	長田 光世
2007年	171	地域通貨を用いた多摩川源流地域における環境機能の向上に関する研究	吉田 徳久
2007年	172	多摩川における河川氾濫と下流域農村に関する歴史人口学的分析—平川家文書からみた荏原郡・六郷領・下九子村	林 和光
2007年	173	多摩川流域の考古学的遺跡の成立と古環境復元	比田井民子
2008年	174	住民の目で見つけた多摩川の35年	柴田 隆行
2008年	175	みんなで作る水循環市民プラン	佐藤 節子
2008年	176	多摩川河床に見られる下部更新統上総層群の長鼻類・偶蹄類足跡化石群の分布調査	福嶋 徹
2008年	177	玉川上水におけるカメ類の分布と個体群構造調査	佐藤 方博
2008年	178	八王子(浅川水系)市内の用水路の通水システムと水利用形態の実態調査および	須藤 訓平

		び、保全、活用にむけた可能性の研究	
2008年	179	鯉川に生息するゲンジボタルの発生とその生活環境の研究	浅原 俊宏
2008年	180	地域の食生活を支えた水車の技術—野川を中心に—	小坂 克信
2009年	181	多摩川流域の畑作農家における生活文化の民俗的変容—生業・食生活・生活用水・年中行事・贈答慣行を中心に—	増田 昭子
2009年	182	巨樹・巨木調査と「源流資源マップ」作成	中村 文明
2009年	183	多摩川流域におけるヒメビロウドカミキリ個体群の分布と保全	新里 達也
2009年	184	市民参加調査による多摩川における洪水攪乱後の礫河原鳥類の動態についての研究	島田 高廣
2009年	185	多摩川流域市民学会の開催	長谷川 博之
2009年	186	交響詩「多摩川の流は絶えずして138」のコンサート活動を通して環境の啓発活動	仙道 作三
2009年	187	玉川碑関係史料及び論考集	稲葉 和也
2009年	188	多摩川下流都市における谷戸の実際～生態学的現状と資源的展望～	長谷川 友紀

3) 多摩川源流資源調査を地図に反映させる

とうきゅう環境財団の支援を受けて、1994年から10年間にわたり、多摩川源流域の淵、滝、尾根、沢などの名称とその由来を調査研究し、その成果を多摩川源流絵図（多摩川源流絵図塩山・丹波山版、源流絵図小菅版、源流絵図奥多摩版）としてまとめ上げてきた。絵図として、出版し広く普及してきたが、その範囲は限られている。今回、その成果をWEBGISに載せ、流域の誰でも、いつでもどこでも見ることが可能になれば、源流資源の流域への普及・浸透の効果は計り知れない。未だ、地図上に落とすただけであるが、必要な分析と解説を施せば源流の価値や魅力を流域に発信していくことが可能になる。今回は、以下の表のように小菅の各地区の小字112箇所と多摩川源流域の地名396箇所を可視化することが出来た。

小菅村の小字名とその由来の一覧表

(1) 小字名とその由来 一覧

No	地区	小字	由来
1	東部	日向金風呂	「ヒナタカナプロ」と呼ばれている。大成の大寺にあった金風呂が埋められた土地を金風呂と呼ぶようになったという。日向とは日当たりが良くて暖かいという意味。
2	東部	大成	成はナリ、ナルイにつづるもので、緩やかな傾斜地を意味した。江戸の昔から鴨沢や川野村からの旅人は、大成、余沢を通して甲州に向かったが、その傾斜地に集落が形成され、大成と呼ばれるようになったのであろう。
3	東部	梅ノ木久保	梅ノ木が植えられていた窪んだ耕作地のことで、この梅ノ木沢には、水車が二台回っていた。
4	東部	姥ガ懐	姥の懐のように、南向きでよく日が当たり、ポカポカと暖かい場所をウバガフトコロという。作物も良く育ち麦やコンニャクが栽培されていた。
5	東部	大茶ア	開墾地で地形が良かったのでお茶畑が多かったことからこの名前が生まれた。ここには、養蚕の桑畑も広がっていた。また、棚口と呼ばれる清水が流れていて、余沢の水源として利用された。
6	東部	大夏地	この場所は日当たりが良い広い土地である。御嶽神社の下から東にかけての耕地である。
7	東部	下夕畑	地元では「シタハタ」と呼ばれているが、大茶アや大夏地の下のほうにある畑がここにあたる。

8	東部	タンノカヤ	茅場は山の上であり、茅を長いまま切って束ねて背負って降りて炭俵を作った。しかし、タンノカヤあたりでは茅は刈れなかったのでこの名の由来は知れず。
9	東部	高橋平	高橋とは台地の端を意味している。ここは小菅川の右岸に位置し山裾が大きく迫り出した十二天のある平らなところ。昔はこの場所に行く橋がすぐ近くにはなく玉川の古橋場を通して川を渡った。
10	東部	玉川	三頭山から流れ下る玉川の流域全体の土地。玉川のはっきりした由来は不明であるが、玉には、美しいもの・大切なものの喩えの意味が込められているので、この川はキラキラ輝く美しさを秘めていたのであろう。
11	東部	セト	川の流れの速いところを瀬というが、その瀬の入り口にあたることからこの呼び名が生まれたのであろう。
12	東部	余沢	ここは、交通の要所で口留番所(関所)が置かれた。甲州裏街道の一つにあたり、雲取、鴨沢から大成、余沢を抜けて白沢、大月の七保へといたる富士講の道として利用された。
13	東部	棚沢	棚とは段々となって下り降りる流れのことで沢全体が傾斜のきつい流れになっているところから棚沢と呼ばれた。
14	白沢	井戸入	地元では「イデーリ」と呼ばれているが、この沢は昔「井戸川」と呼ばれ親しまれており、きれいで美味しい水が流れていた。
15	白沢	作ノ宮	作ノ宮神社は白沢の氏神様であるが、その神社が作られたことから作ノ宮と呼ばれている。このお宮には、オオクニヌシノミコトが祀られている。
16	白沢	白沢夏地	白沢地区の中で日当たりがよく暖かく、作物の収穫の多い一等地の畑として利用されている土地。
17	白沢	白沢	この白沢川の上流部には、三頭山や奈良倉山などがあり深い森林に覆われている。透明感溢れる水の様子を白い水の流れる沢「白沢」と呼んだのであろう。
18	白沢	ムッカ	白沢地区から見て北東方向にある沢を向川と呼んでいた。この向川が「ムッカ」と訛ったもので、普段は水量は少ない。
19	白沢	降矢戸	地元では「フリヤード」とよばれている。ここが富士講の通り道であったことから誰でも利用できる「古宿」があり、フルヤドが「フリヤード」と訛り、降矢戸と漢字が当てられたのであろう。
20	白沢	エボシ	向山の中腹にエボシの形をした岩があり、エボシ岩と呼ばれているが、その岩のある土地のことで、戦前は炭焼きで山が開けるとエボシ岩が見えたという。
21	白沢	笹畑	一帯がクマザサで覆われていることから、笹畑と呼ばれていた。炭焼きや焼畑の際も笹が多くて作業に手間取り苦労したという。
22	白沢	発沢	富士講が余沢から登ってきて最初に出会う沢、「初沢」が訛って、「ホッサワ」・発沢になったと言われている。昔、富士講が盛んであったことを偲ばせる地名である。

23	小永田	小永田	小永田は事樹などからの移住者が切り開いた集落といわれている。明治の末の火災で大半が焼け、詳しい資料は乏しい。小永田の由来は不明である。
24	小永田	小永田上	小永田地区の標高が高いところで、小永田地区の畑として利用されている。
25	小永田	水ノ久保	吉野地区(13世帯)の住民が、ここから飲料水を引いている。
26	小永田	沢入	小永田を流れる沢に、大川が流れる沢がある。その大川の一番奥まった場所を沢入と呼んだ。地元では「セーリ」と親しみを込めて呼んでいる。
27	小永田	ハケ	粘土と石の混じった地層のため、所々で崩れている様をハケと呼んだ。ここではコンニャク、ソバ、ダイコン、白菜など自家用野菜が栽培された。
28	小永田	ハケ沢	ハケから流れ出る水が、沢となって流れる土地。
29	小永田	吉野	この地は葦の生い茂った野原であったところから「葦野」が縁起の良い「吉野」に変化したのであろう。地元では、「ヨシツバラ」と呼ばれている。
30	小永田	浅久保	この久保には、小さな清流が流れていておいしいと評判の水が流れている。窪みが浅いところから生まれた地名と思われる。
31	小永田	坂東	昔、坂といえば、峠を意味した時期がある。この地が峠の東に位置していることから坂東と呼ばれたのであろう。あるいは坂が東に面していることからこの呼び名が生まれたのかもしれない。富士講の方々が、余沢から白沢を通り、坂東をのぼって佐野峠にいたり大月の七保に下っていった。
32	小永田	坂東別路	富士講の道が分かれる場所のことで、講は、オボウ山を越え大月のカキノキゲ一口を抜けて富士に向かったという。
33	小永田	日向サス	南向きの日当たりの良い沢であることからこの呼び名が生まれた。昔からソバやトウモロコシ、桑などの栽培に利用された。
34	小永田	浄進場	富士講が、休息をかねて、手足や顔を洗ったりしたため、地元では「ショウジンバ」と呼ばれている。精進場が、浄進場に変化したと思われる。
35	小永田	奈良倉	奈良倉山(1349メートル)のある場所。奈良という地名は、なだらかな様子を表すので、大きくてなだらかな山との意味から奈良倉山という名前が生まれた。
36	小永田	大白沢	源頭は松姫峠で都の水源地から流れ下っている。白沢の支流で一番長い沢という意味で大白沢と呼ばれている。
37	小永田	事樹	この地は早くから人々が住み着き、水の便も日当たりも良い土地だった。「ます」は「増す」で収穫を増やしたり、家族を増やしたりと縁起の良い言葉とされたことから、こうした名前が生まれたのであろう。
38	小永田	横道	富士講の通って道で、横になだらかに延びた道を横道と呼んだ。
39	小永田	釜土沢	この沢の青い粘土質の土が熱に強かったため、炭焼き釜のクド張りや囲炉裏のヒジロ、家の倉壁などに利用された。熱に強く釜の土に向いていたためこの名前が付いた。

40	小永田	ハイマゼ	地元では「ヘーマゼ」と呼ばれている。焼畑をして灰を土に混ぜ合わせ畑づくりをしたことから、焼畑にちなんだこうした名前が生まれた。
41	中組	山沢	オオマトイ(標高 1409 メートル)を頂とする山から発したこの流れは、ヤモウ尾根を挟んで左右に流れ下る。大抵の沢は尾根と尾根に挟まれて流れ下るが、この沢は、沢のために山が配置されている印象を与える。
42	中組	ヒナテ	山沢の対極で南側に位置し、日当たりが良いことから、ヒナタがヒナテに訛ったものと考えられる。
43	中組	山沢入	山沢の一番奥まったところ。小菅では川に入って行った一番奥地を川入とか沢の場合沢入と呼ぶ。本谷と枝谷の合流地点にカミュイドという素敵な場所がある。平将門の一族がここで休んで髪を結ったといわれる場所である。
44	中組	山沢向	山沢地区の向かいに面した、山の傾斜の土地をこの様に呼ぶ。
45	中組	大六天	ここに山沢神社やお不動さんが祀られていることから、この名前が生まれたと思われる。昔からこの一帯を大六天耕地と呼んでいる。
46	中組	タノモクリ	この大地は三段の棚から成り立っており、上の二段に集落が形成されている。段々と続く耕地の一番上に盛り上がったところがある様子を「タナモクリ」と呼んだ。その「タナモクリ」が「タノモクリ」に変化した。
47	中組	大久保	この地域で一番大きな窪地になっていることから、大久保と呼ばれている。現在、畑やグラウンドとして利用されている。
48	中組	梅の木平	梅が植わっていたことから、こう呼ばれている。現在は主にソバ畑として利用されている。
49	中組	マフジ久保	藤の種類に紫色の花を付けるマフジと呼ばれるものがあり、このマフジが多くはえていた窪地。
50	中組	井狩	この地区には大昔湿地があり、多くの鳥が飛来した。とりわけ山鳩が多く集まった。昔、鳩を「イカル」と呼んだ。鳩が多く集まる場所、「イカルの地」が「イカル」に変化したのだろう。また沢が大雨の時、堰にぶち当たりまるで怒ったように流れ下った。水が怒り狂うさまから「イカリ」という呼び名が生まれたのであろうか。
51	中組	井狩原	地元の人は「イカリツパラ」と呼んでいる。昔ここに、池や湿地があり、多くの鳥が集まったという。
52	中組	コセド	裏側のことをセド(背戸)と呼んでいる。コセドとはすぐ裏手のことで、ずっと離れた裏手のことをオーセドと呼ぶ。
53	中組	川上沢	井狩沢の上流にあたる、井狩地区から見ると、川上にあたる所からこう呼ばれている。
54	田元	淀	川がゆっくり流れる様を淀むといい、曲がり淵を中心に大きな湿地帯が広がっていた。淀の周辺は夏には蛍やヒキガエルでにぎわったという。

55	田元	高淀	淀の北側の山手が高淀で、畑には麦やサツマイモなどが作られた。
56	田元	ドウドコロ	平山の対岸に位置している。古老の話によれば、昔この地の上に寺地と呼ばれる土地があったという。その当時の寺のお堂がこの地にあったことからこの名前が生まれたものと推察される。
57	田元	転石	急斜面の畑が広がっており、大きな石がいっぱいあり、落石の多い場所。地元では、石が落ちることを石が廻るといふ。「廻る」が「転ぶ」に変化してこの地名が生まれた。
58	田元	竹ノ沢	ここは、小菅で最初に竹が生えていたところ。小菅の竹はここから広がったといわれている。
59	田元	平山	川向こうの平らな場所で、河岸段丘から生まれた土地。淀から平山一帯は松林に覆われ、ハツタケがよくとれたという。
60	田元	腰越	川を越すのに橋が架かってなかった時代に、腰まで浸かって対岸に渡ったことからこの名が生まれたと思われる。
61	田元	田元	この集落は、大菩薩から延びた大きな屋根の麓(ふもと)に位置している。袂(たもと)にも山の麓という意味がある。この「タモト」から「田元」へ転じたものと思われる。
62	田元	池ノ尻川原	池ノ尻に続いた川原の土地。小菅川は暴れ川だったので、川の両岸に同じ地名がある。
63	田元	田元上	田元の上の方で「オオワゼ」「シタワゼ」という屋号が今でも残っているが、上手(ウワテ)が「ワデ」に訛り、「ワデ」が「ワゼ」に変化したと思われる。
64	田元	田元原	日当たりは麓なのであまり良くないが、田元地区の畑として利用されている平地。
65	川池	池ノ尻	曲がり淵中心に大きな淵があり、その池のように大きな淵の尻に位置した土地を池ノ尻と呼んだ。
66	川池	ナツチ	この地区の土地では一番日当たりのいい場所。麦を中心に大豆、ヒエ、粟等を栽培した。
67	川池	小峯	城ノ沢と竹の沢の間に位置する小高い峰で、お寺の真上にある。切り替え畑があり、ソバ、粟、大豆などが作られていた。
68	川池	獅子倉	集落の外の危険なところは危険を知らせる地名が付けられた。地崩れしやすい地をしめす「しし」、崖を表す「かき」等がある。その「シシ」が「獅子」に変化したと思われる。
69	川池	川久保	小菅川に沿って出来た小さな河岸段丘の窪んだ一帯を指して川久保と呼んだと思われる。
70	川池	カヅ久保	この沢にはカヅラが多かったので、カヅラ久保が訛ってカヅ久保に変化した。

71	川池	イツ沢	「一本沢」が「イツ沢」に変化したものであろう。オオダワ峠と古老が呼んでいた峠(大丹波峠)に大きな塚がある。その付近から丹波山に下った辺り一面をイツ沢を呼ぶ。
72	川池	今川	宮川の上流部にあたり水の量は少ない。今川峠の名前もここから来ている。なぜ今川と呼ばれているのかは不明。
73	川池	日向今川	今川の沢に沿った場所が一番日当たりのいい土地。畑は広く麦、コンニャクを中心に養蚕のための桑などが栽培されていた。
74	川池	宮川	箭弓神社の前を流れることから、宮川と呼ばれている。ここは道路端からもヤマメの姿を見ることができる。
75	川池	岩花	平将門伝説に絡む場所で、敵に追われて放たれた矢が岩に無数に突き刺さり、あたかも花のように見えたことを指している。
76	川池	川久保向	川久保の向かい側にあたる。小菅橋を渡った川沿いの一帯。
77	橋立	中河原	小菅川は昔暴れ川であったが、今も中河原、下河原と呼ばれる地名が残っていることからその川原の広がりが見える。
78	橋立	天ノ久保	上の山の地続きにこの天ノ久保はある。付近に八幡神社があることから天の文字を頂いたものと思われる。久保は窪みのこと。
79	橋立	上の山	この畑を見上げると思わず息を呑んでしまうほどの存在感のある畑が続く。橋立の人々が利用する畑で、部落のすぐ上に位置した。1年中利用するので、親しみを込めて上の山と呼んだ。
80	橋立	橋立	この地名の由来はいろいろある。昔この地区の特産として箸を産出した。作った箸を立てかけていたことから橋立と呼ばれた。さらに村のお不動を建てる場所を決めるのに箸を立てて決めたことからこの名が生まれたという。
81	橋立	上割間	地元では、「カミナッチ」と呼ばれている。上割間は、土地の区分が線で引いた様に正確にほぼ同じ広さで整然と分かれていることからこの名が生まれた。
82	橋立	中丸	地元ではこの地名はあまり知られていない。地元ではこの一帯を「ニイジャヤマ」と呼んでいる。
83	橋立	西沢	地元では「ニイジャー」と呼ばれている。橋立地区の西に位置した小さな沢が流れている場所である。
84	橋立	清水	水の久保沢というきれいな水が流れている。この沢は西沢に合流する。
85	橋立	竹ノカヤ	地元では「タケノケエ」と呼ばれている。この地は、深く切り込んだ地形を持つが、深い切り込みの谷を峽(カイ)ということからカイがケエに訛ったものと思われる。
86	橋立	小仏	仏を葬る墓地のある場所から、この名前が生まれたと考えられる。

87	橋立	小沢	小さな沢が流れている場所だが、地元ではこの沢は「ホッサワ」と呼ばれている。この沢は清水が流れていたり、伏流水となって沢が干し上がっていたりする。沢が干すことから「ホッサワ」が生まれたと思われる。
88	橋立	甲斐渡戸	地元では「ケーワド」と呼び、甲斐の国(甲府)へ旅立つ出発点にあたる。棚倉からシヨナメに出て、牛ノ寝を通り、石丸峠を抜けて甲府へ向かった
89	橋立	田口	わさび田がここの入り口にあたることから、この名前が生まれたものと思われる
90	橋立	川入	「カワイリ」と呼ばれ、小菅川の上流部にあたる。雄滝は、昔魚止めの滝と呼ばれており、この滝から上流は踏み入る人もいなかった。今は都の見事な水源林が広がっている。
91	橋立	橋立向	橋立地区の向かい側の山の斜面。
92	橋立	鯨沢	尾根が鯨の形をしていることから、鯨沢と呼んでいる。地元では、鯨尾根のことを「クジラオ」と呼んでいある。
93	橋立	菅平	植物の「菅」が一带に自生している平地があることから、この呼び名が生まれたのであろう。
94	橋立	渡茶ア	昔、川を渡って仕事に通った。地元の言葉・「渡っちゃあ」からこの名が生まれたのであろう。この地に今は「希望の館」が建てられている。
95	長作	鶴峠・栗山	【鶴峠】鶴川の源頭で昔、西原村大羽峠から遠望すると、鶴が羽を広げた姿に見えた事からこの名前が付いたという。また、この峠道は、カヅラの蔓のようにくねくねと曲がっていたことから「ツル峠」と呼ばれ「鶴峠」に変化したともいわれている。【栗山】昔、この一帯の多くはクリやナラの木で覆われていたので、栗山と呼ばれた。一時、開拓され畑として利用された時期もあった。
96	長作	奥ノ茅	茅葺き屋根の茅をかるための茅畑があった場所。南向きの大きな畑があり、長作の茅葺き屋根の葺き替えには、この茅が利用された。
97	長作	コヤケ	地元では「小谷毛」の漢字が当てられている。鶴川の源頭に位置する小さな谷からこの名が生まれたのであろう。この谷は昔から地元の人々にとっては恵みの谷であった。
98	長作	御堂街道	長作観音堂に通じる道。村中から鶴峠を越え、ここを通過して観音堂にお参りした。地元では「ミトケイド」と呼んでいる。
99	長作	神楽	この谷に長作観音堂の「古観音」と言われるところがある。ここに観音様が祀られていた時代には、霊をなぐさめるための神楽舞が奉納されたのであろうか。
100	長作	神楽入	神楽谷の奥まった場所で、現在、観音様が祀られている。昔はここに観音堂が建てられていたという。育ち石があり、夫婦岩、観音滝(音無しの滝)、荷渡し場など昔の賑わいを偲ぶ地名が今も数多く残る。
101	長作	吉原	ここは昔、葦の育つ河原であったので「葦原」が縁起の良い「吉原」に転じたのであろう。

102	長作	牛飼	地名の由来に関しては、牛が会ったところ、という意味の「牛会」が、「牛飼」に変化したものと思われる。地元では、「ウシガエシ」と呼ぶ人もいて、牛返し、つまり牛が会って引き返したことからこういう別名もある。
103	長作	大長作	三頭山から流れ下る長作地区で一番長い谷が、大長作谷である。このためこの地区を大長作と呼んだ。
104	長作	小米沢	米の収穫は少なかったので、小米沢の地名が付けられたといい伝えられている。
105	長作	打越	昔、十文字に向かう人々が一休みするのに利用した小さな平地を中心にした場所をこう呼んでいる。昔は、タバコの火をつけるのに火打ち石を利用する人がいた。赤石を打ってタバコに火をつけて一服し峠を越えた逸話からこの地名が生まれたという。
106	長作	倉骨	倉骨耕地は肥料のなかった時代、小菅村の一等地三ヶ所の一つに数えられた穀倉畑であった。穀倉が、倉穀、倉骨へと変化したとも考えられる。
107	長作	長作	昔、農耕文化が広がり始めたころ、この谷が農耕の中心になったと思われる。長い谷と耕作場とが絡み合って「長作」という地名が生まれたのであろう。
108	長作	前原・前原上	【前原】ここでは、神楽入が基準となり、神楽入の前にある平らな土地を前原と呼んだ。長作では、この神楽入と御鷹神社が集落の拠り所として大切な位置を占めている。【前原上】前原の山側の高い場所を指して、前原上という。
109	長作	森向	森向かいには御鷹神社の森が基準となり生まれた地名である。御鷹神社の向かい側にあたるので、こう呼ばれるようになった。
110	長作	森の上	御鷹神社の森の上の方にある土地
111	長作	井戸沢	井戸沢は自然の流水を利用し、数戸が井戸水の如くに利用していたことから、この名前が付いた。
112	長作	秋切	昔、山仕事といえば炭焼きか焼き畑、材木の切り出しなどが主であったが、この土地は、日蔭の所も多く、炭焼きも焼き畑も秋までで仕事を切りあげることから、秋切と呼ばれた。

多摩川源流および流域の情報一覧表

(1) 多摩川源流および流域の情報 一覧

No	主題種別	主題名称
1	地形・地物	男滝(お)
2	地形・地物	源五郎滝
3	地形・地物	ゴンエイ出合い淵
4	地形・地物	キンザ小屋淵
5	地形・地物	長沢出合い淵

6	地形・地物	昔鉄砲出し跡
7	地形・地物	ツリガネ淵
8	地形・地物	桜淵
9	地形・地物	キムラ淵
10	地形・地物	調布飛行場
11	地形・地物	橋立地区の畑
12	地形・地物	妙見の頭
13	地形・地物	水干沢
14	地形・地物	松姫トンネル(施工中)
15	地形・地物	深城ダム
16	地形・地物	林道玉川線
17	地形・地物	林道笹畑線
18	地形・地物	奥多摩演習林オルソフォトマップ
19	地形・地物	松姫トンネル出入り口(施工中)
20	地形・地物	丹波山村全域鳥瞰図
21	地形・地物	黒えんじゅの頭
22	地形・地物	多摩川源流域鳥瞰図
23	地形・地物	甲州市全域鳥瞰図
24	地形・地物	土室谷鳥瞰図
25	地形・地物	奥多摩町全域鳥瞰図
26	地形・地物	一之瀬川
27	地形・地物	避難小屋
28	地形・地物	小菅村鳥瞰図と源流絵図小菅版
29	地形・地物	羽村堰
30	地形・地物	テングウ淵
31	地形・地物	古橋場ノ淵
32	地形・地物	アン沢
33	地形・地物	釜ツ淵
34	地形・地物	池の平
35	地形・地物	浅間淵
36	地形・地物	熊切沢
37	地形・地物	ナツチ沢
38	地形・地物	大成沢
39	地形・地物	ウバガフトコロ
40	地形・地物	マキムシバの淵
41	地形・地物	キネッコ淵
42	地形・地物	ヤチグラの滝
43	地形・地物	平山淵
44	地形・地物	ドウドコロ淵
45	地形・地物	雄滝
46	地形・地物	矢花淵
47	地形・地物	白糸の滝
48	地形・地物	赤沢出会い下淵
49	地形・地物	観音岩
50	地形・地物	無名滝(天狗滝)
51	地形・地物	妙見五段の滝

52	地形・地物	六間ノ滝
53	地形・地物	コウオドメ滝
54	地形・地物	ゼンベイ滝
55	地形・地物	雲取の大滝
56	地形・地物	ゼンダナ淵
57	地形・地物	ミノト谷出合い淵
58	地形・地物	キリドウシ
59	地形・地物	日向谷出合い
60	地形・地物	ナグリ沢出合い淵
61	地形・地物	岩清水
62	地形・地物	モミソクボ
63	地形・地物	マラダシ淵
64	地形・地物	トチのクボ
65	地形・地物	オオウオドメ滝
66	地形・地物	ハ丁橋
67	地形・地物	カジ小屋淵
68	地形・地物	猿すべり淵
69	地形・地物	上保之瀬橋淵
70	地形・地物	キンザ小屋淵
71	地形・地物	ガニザワ出合い淵
72	地形・地物	曲り尾根淵
73	地形・地物	孫窓出合い淵
74	地形・地物	カラマツ出合い淵
75	地形・地物	ヒカリ石
76	地形・地物	ナカゴヤ沢出合い淵
77	地形・地物	昔梁跡
78	地形・地物	重郎次淵
79	地形・地物	昔鉄砲出し跡
80	地形・地物	龍巖淵
81	地形・地物	猫ダル尻淵
82	地形・地物	清高まわし
83	地形・地物	呑竜淵
84	地形・地物	淵のう
85	地形・地物	茶坊淵
86	地形・地物	コウゾウ淵
87	地形・地物	臼淵
88	地形・地物	泡淵
89	地形・地物	赤石の滝
90	地形・地物	馬の背淵
91	地形・地物	天狗島
92	地形・地物	クロオ久保淵
93	地形・地物	猿はね淵
94	地形・地物	サス沢出合い淵
95	地形・地物	エゴの淵
96	地形・地物	山の神の下淵
97	地形・地物	ゲンチョン淵

98	地形・地物	暗(くらみ)
99	地形・地物	ウバノフトコロ
100	地形・地物	フタマタ川
101	地形・地物	花水淵
102	地形・地物	おんまわしの淵
103	地形・地物	貝久保尻淵
104	地形・地物	熊沢尻
105	地形・地物	下ゲンテヨン淵
106	地形・地物	小室大淵
107	地形・地物	松木淵
108	地形・地物	水神淵
109	地形・地物	湯 淵
110	地形・地物	笹出淵
111	地形・地物	丸淵
112	地形・地物	ミツマタ出会い淵
113	地形・地物	桜 淵
114	地形・地物	オハラ小屋跡
115	地形・地物	ミズヒキアナ
116	地形・地物	オツボ滝
117	地形・地物	イセバシの大淵
118	地形・地物	大川のカマアタマ
119	地形・地物	霧立ち姫の碑
120	地形・地物	男釜
121	地形・地物	女釜
122	地形・地物	ウバナギ尻の大淵
123	地形・地物	モチ小屋淵
124	地形・地物	バケモノ淵
125	地形・地物	おっ立ち石
126	地形・地物	サクガ淵
127	地形・地物	大明神下
128	地形・地物	ゲンゾウ淵
129	地形・地物	ヤネヲ淵
130	地形・地物	シラゴ淵
131	地形・地物	寺の下
132	地形・地物	小川出会い淵
133	地形・地物	ナメトロ
134	地形・地物	立下の淵
135	地形・地物	茶釜淵
136	地形・地物	与一淵
137	地形・地物	半屋川の大淵
138	地形・地物	エゴの淵
139	地形・地物	大淵
140	地形・地物	カゴ岩
141	地形・地物	牛金淵
142	地形・地物	タル沢出会い
143	地形・地物	お花ドウ

144	地形・地物	ミノト橋
145	地形・地物	マストリ淵
146	地形・地物	上ウバ淵
147	地形・地物	ナガシガワラ
148	地形・地物	菊次淵
149	地形・地物	手取淵
150	地形・地物	ゴリョウ滝
151	地形・地物	アンダイラ
152	地形・地物	上ウバ淵
153	地形・地物	羽根戸淵
154	地形・地物	戸望岩
155	地形・地物	平の沢出会い滝
156	地形・地物	おみつちゃん河原
157	地形・地物	地蔵淵
158	地形・地物	下ウバ淵
159	地形・地物	セベヤ出会い
160	地形・地物	風穴の大淵
161	地形・地物	ウリの木淵
162	地形・地物	メズギャーラ
163	地形・地物	ゴーロ
164	地形・地物	坊主淵
165	地形・地物	銚子滝(オイラン淵)
166	地形・地物	藤下がり
167	地形・地物	イモアライ滝
168	地形・地物	バクチ岩
169	地形・地物	小滝
170	地形・地物	お玉淵
171	地形・地物	犬戻り
172	地形・地物	昔大橋
173	地形・地物	丸入道淵
174	地形・地物	鷹ノ巣出会い淵
175	地形・地物	瀬波
176	地形・地物	イザエモン淵(イゼーモン淵)
177	地形・地物	アミハリドウ
178	地形・地物	馬マワシナギ
179	地形・地物	ドーキ滝
180	地形・地物	弁天
181	地形・地物	六段の滝(無名滝)
182	地形・地物	ザッコ淵
183	地形・地物	キンザ淵
184	地形・地物	古ミノト橋
185	地形・地物	キリドウシノ滝
186	地形・地物	カナ小屋の大淵
187	地形・地物	イヤゴヤ淵(岩小屋淵)
188	地形・地物	オタツが滝
189	地形・地物	下駄小屋滝

190	地形・地物	龍神滝(下駄小屋滝)
191	地形・地物	河童淵
192	地形・地物	ネッコ滝
193	地形・地物	イオドメ滝
194	地形・地物	膳棚の滝
195	地形・地物	鉄砲出し跡
196	地形・地物	お玉淵
197	地形・地物	三条大滝
198	地形・地物	オヨウ淵
199	地形・地物	不動滝
200	地形・地物	銚子滝
201	地形・地物	出会い滝
202	地形・地物	箱淵
203	地形・地物	丸淵
204	地形・地物	笛ヶ滝
205	地形・地物	テンカン淵
206	地形・地物	ヤソウ小屋滝
207	地形・地物	イオ止め滝
208	地形・地物	二重滝
209	地形・地物	青岩大滝
210	地形・地物	竜喰出会い滝
211	地形・地物	精錬場の滝
212	地形・地物	二番滝
213	地形・地物	扇状滝(無名滝)
214	地形・地物	金五郎の滝
215	地形・地物	ヒゲスリ
216	地形・地物	小室淵
217	地形・地物	石滝
218	地形・地物	ヤマメ淵
219	地形・地物	千工の滝
220	地形・地物	二重滝
221	地形・地物	モミジクボ
222	地形・地物	オロクボの滝
223	地形・地物	雌滝
224	地形・地物	ねじれ滝
225	地形・地物	タカヘツリ
226	地形・地物	サカサ沢淵
227	地形・地物	三番滝(無名滝)
228	地形・地物	巨石群
229	地形・地物	三段ノ滝(無名滝)
230	地形・地物	四番滝
231	地形・地物	不動滝
232	地形・地物	二段ノ滝(無名滝)
233	地形・地物	泉水滝
234	地形・地物	三番滝(無名滝)
235	地形・地物	小室大エゴ淵

236	地形・地物	松尾出会い滝
237	地形・地物	泉水大滝
238	地形・地物	三番滝(無名滝)
239	地形・地物	二股滝
240	地形・地物	オブチゴウ滝
241	地形・地物	羽根戸飛越岩
242	地形・地物	魚止めの流(ウオドメの流)
243	地形・地物	サカリ山の滝
244	地形・地物	登魚尾滝
245	地形・地物	雨乞い滝
246	地形・地物	マンガの滝
247	地形・地物	無名滝
248	地形・地物	無名滝
249	地形・地物	無名滝
250	地形・地物	無名滝
251	地形・地物	無名滝
252	地形・地物	羽根戸飛越岩
253	地形・地物	西谷出会い
254	地形・地物	キエモン小屋
255	地形・地物	悪谷出会い
256	地形・地物	大京谷(上滝、下流)
257	地形・地物	三又の大淵
258	地形・地物	聖滝
259	地形・地物	小さい淵が連続する
260	地形・地物	丸淵
261	地形・地物	下百尋の滝
262	地形・地物	シケン小屋淵
263	地形・地物	鳥居谷出会い
264	地形・地物	犬麦谷出会い淵
265	地形・地物	滝上谷出会い
266	地形・地物	クエモンの大淵
267	地形・地物	キリ木小屋の大淵
268	地形・地物	材木小屋の大淵
269	地形・地物	スズ坂出会い淵
270	地形・地物	伏木沢出会い淵
271	地形・地物	カローの出会い
272	地形・地物	クラミの沢出会い
273	地形・地物	イチザワ出会い
274	地形・地物	鍾乳洞
275	地形・地物	オオグロム
276	地形・地物	百尋の滝
277	地形・地物	トウタク
278	地形・地物	女滝(め)
279	地形・地物	百豊淵
280	地形・地物	魚止めの滝
281	地形・地物	広河原

282	地形・地物	山王大淵
283	地形・地物	安穩淵
284	地形・地物	アマケ淵
285	地形・地物	梵天岩
286	地形・地物	銚子滝
287	地形・地物	ショウジン場淵
288	地形・地物	神庭沢出会い
289	地形・地物	箱淵
290	地形・地物	犬つるし滝
291	地形・地物	カシの木淵
292	地形・地物	丸淵
293	地形・地物	北の沢魚止めの淵
294	地形・地物	三筋ヶ滝
295	地形・地物	ハコ淵
296	地形・地物	シチケ淵
297	地形・地物	地蔵滝
298	地形・地物	六本淵
299	地形・地物	不動滝
300	地形・地物	赤沢小屋
301	地形・地物	棚倉尾根
302	地形・地物	マザキ尾根
303	地形・地物	今川峠
304	地形・地物	今川地区オルソマップ
305	地形・地物	葛野川ダム
306	地形・地物	三つ子山(桜の山)
307	地形・地物	村有林作業路入口
308	地形・地物	村有林大橋式路網
309	地形・地物	小菅川の源流域
310	土壌・地質	ゴケンノ滝
311	気象・海象	定点観測用温度計設置点
312	眺望・景観	多目的埠頭に係留中の日本丸
313	眺望・景観	最近の木場の風景
314	眺望・景観	お台場の風景
315	眺望・景観	森林ボランティア活動
316	眺望・景観	船の科学館前に係留中の海王丸
317	眺望・景観	秋の里山風景
318	眺望・景観	払沢の滝
319	眺望・景観	新緑の柳沢川溪谷
320	眺望・景観	東京港東航路入り口に建設中の自動車専用道
321	眺望・景観	ベイエリアとレインボーブリッジ
322	動物	熊が出没
323	植物	さくら草の団地
324	植物	演習林林況図
325	植物	千本ツツジ
326	植物	母樹調査
327	植物	自然の再生

328	植物	森林資源の劣化
329	植物	御鷹神社モミの巨木
330	生活文化	水車小屋
331	生活文化	農林産物直売所
332	生活文化	小菅溪谷の鯉のぼり
333	生活文化	聖フランシスコ修道院子供の家
334	生活文化	泉水小屋跡
335	生活文化	間伐作業の体験学習に参加
336	歴史・伝統	仏舍利塔
337	歴史・伝統	源太川遺跡
338	歴史・伝統	高尾成畑遺跡
339	歴史・伝統	郷土資料館
340	歴史・伝統	水干と水神社
341	歴史・伝統	荷渡し場
342	歴史・伝統	信玄屋敷
343	歴史・伝統	古観音
344	歴史・伝統	浅間神社
345	歴史・伝統	長作観音堂(重要文化財)
346	観光資源	牛の寝登山口の道標
347	観光資源	調布飛行場まつり
348	観光資源	深山橋バス停
349	観光資源	三条小屋・三条の湯
350	観光資源	奥多摩小屋
351	観光資源	《源流古道・水源林体験の旅》終着点
352	観光資源	いかだレーススタート地点
353	観光資源	いかだレースゴール地点
354	観光資源	多摩川いかだレース写真
355	観光資源	雄滝雌滝
356	観光資源	温泉駐車場・公衆トイレ
357	観光資源	丹波山温泉のめこい湯
358	観光資源	ローラーすべり台
359	観光資源	七つ小屋
360	観光資源	オマキ平コース
361	観光資源	三つ子山(桜の山)ハイキングコース
362	観光資源	三つ子山ハイキングコース
363	観光資源	三つ子山ハイキングコース
364	観光資源	都留峠～三頭山コース
365	観光資源	三頭山コース
366	観光資源	モロクボ平コース
367	観光資源	山沢入りのヌタ
368	観光資源	棚倉沢(蛇行)コース
369	観光資源	棚倉沢コース
370	観光資源	源流体験講座
371	観光資源	多摩源流小菅の湯
372	観光資源	村営つり場
373	観光資源	雄滝

374	観光資源	白糸の滝
375	観光資源	大菩薩登山口の道標
376	防災・被災	災害対策の給水施設
377	防災・被災	林道土砂流出被害その2地点
378	防災・被災	下降気流(ダウンバースト)による倒木被害
379	防災・被災	林道土砂流出被害その1地点(H18.09)
380	防災・被災	林道土砂流出被害その3地点(H18.9)
381	防災・被災	防災へ用へりポート
382	防災・被災	倒木被害想定地点
383	防災・被災	倒木被害地点の方向線
384	地名・地物名	十二天
385	交通機関	羽田空港
386	交通機関	羽田空港着陸便
387	行政・公共	国土交通省京浜河川事務所
388	行政・公共	公共トイレ
389	行政・公共	公共トイレ
390	教育・学習	多摩川源流大学
391	教育・学習	東京農業大学世田谷キャンパス
392	教育・学習	東京農大多摩演習林センター
393	教育・学習	とどろき水辺の楽校
394	その他	国土撮影(株)事務所／格納庫
395	その他	木工沈床による間伐材の活用
396	その他	新玉川橋

4) 多摩川流域の市民グループの活動情報

多摩川では、川をフィールドにして、川と親しみ川に触れる水辺の楽校が各地で展開されている。それぞれの水辺の楽校は、活動する場所によって内容や課題は異なるが、多くの親子を川へと導き、川を教師として親子の成長に貢献している。この活動は、今後ますます広がり注目されていくことだろう。ここでは、多摩川流域の水辺の楽校の一覧表ととどろき水辺の楽校、調布水辺の楽校の活動を紹介する。

①多摩川流域 水辺の楽校 一覧

番号	名称	所在地
1	多摩川源流こすげ水辺の楽校	山梨県北都留郡小菅村
2	青梅・多摩川水辺のフォーラム	東京都青梅市
3	福生水辺の楽校	東京都福生市
4	平井川こどもの水辺	東京都あきる野市
5	あきしま水辺の楽校	東京都昭島市
6	八王子・浅川こどもの水辺	東京都八王子市
7	浅川潤徳水辺の楽校	東京都日野市
8	滝合小水辺の楽校	東京都日野市
9	多摩市水辺の楽校	東京都多摩市
10	たちかわ水辺の楽校	東京都立川市
11	府中水辺の楽校	東京都府中市
12	いなぎ水辺の楽校	東京都稲城市
13	調布水辺の楽校	東京都調布市
14	狛江水辺の楽校	東京都狛江市
15	せたがや水辺の楽校	東京都世田谷区
16	かわさき水辺の楽校	神奈川県川崎市
17	とどろき水辺の楽校	神奈川県川崎市
18	鶯ノ木水辺の楽校	東京都大田区
19	だいし水辺の楽校	神奈川県川崎市

②とどろき水辺の楽校 行事 (先行入力)

NO	開催日時	行事
1	2009年4月29日	開校式(ガサガサ・植物観察・野草テンプラ)

2	2009年5月10日	干潟観察会
3	2009年7月25日～26日	源流体験
4	2009年8月29日	静岡市交流会(静岡の川の生き物と水)
5	2009年9月6日	エコカップいかだ下り出場
6	2009年10月4日	昆虫探しとはっぱのクラフト
7	2009年11月28日	夢ワカメワークショップ
8	2009年12月20日	野鳥観察定点観測
9	2010年1月24日(日)	凧揚げと昔遊び
10	2010年2月6日	夢ワカメワークショップ・ワカメの収穫
11	2010年3月26日	多摩川クリーンアップ&焼き芋・ジャガバター
12	2010年4月29日	2010年度開校式
13	2010年5月16日	河口干潟観察会
14	2010年6月27日	草木染め教室
15	2010年7月24日～25日	多摩川源流体験教室
16	2010年8月21日	多摩川カヌー教室
17	2010年10月11日	環境学習支援
18	2010年10月17日	中原区民祭
19	2010年10月23・24日	第1回源流サミット参加
20	2010年11月27日	夢わかめワークショップ
21	2010年12月23日	野鳥観察&水質検査報告

調布水辺の楽校事業報告

1. 会議の開催

代表者会議、イベント実行委員会を計10回開催し、活動方針・事業内容などについて話し合いを行った。

2. 事業の実施

事業計画に基づき、次の独自企画事業を計画・実施した。

- ・ 昨年度は雨天で計画変更があったが、今年度は全ての事業が天気に恵まれ実施できた。参加者も昨年に比べ大幅に増加し、総数371名となった。
- ・ 対象は、多摩川流域の小学校7校(富士見台・布田・多摩川・第三・飛田給・杉森・染地)の小学生と保護者。事業によっては、安全面を考慮し対象の学年を限定した。
- ・ 事業によっては多摩川漁協調布支部、川崎漁協の協力を得ることができ、

活動の幅が広がると同時に、安全確保もできた。

- ・ 昨年の課題であった富士見台小学校・布田小学校以外の 5 校の関わり方は、今年度もほとんど進歩なく課題のまま残った。
- ・ スタッフの人数も少しずつ増えているが、もっと多くなる様に PR が必要と考える。

- ① 4月29日(水・祝)「HOW あ〜ゆ? IN たまがわ」実施。参加者 104 名
スタッフ 25 名多摩川漁協調布支部 7 名
特別講師 中本 賢
- ② 8月16日(日) アドベンチャーin多摩川 2009
参加者 88 名 スタッフ 18 名多摩川漁協調布支部 3 名 川崎
漁協の協力を頂いた。
- ③ 11月3日(火・祝) 多摩川クリーン作戦&あったか芋煮会
参加者 45 名 スタッフ 16 名
- ④ 2月11日(木・祝) チャレンジ バードウォッチング
参加者 134 名 スタッフ 15 名 (講師を含む)

*事業ごとの詳しい報告書は別に添付。

3. 他団体との交流

調布市環境フェア、こどもあそび博覧会(緑ヶ丘小学校で実施)に参加

5) 多摩川の市民活動の歴史について

多摩川の自然環境のデータを収集・蓄積し、その情報を流域全体で共有する取り組みは、徐々に広がる出あろう。その際、自然環境のデータを社会との関わり、市民運動との関わりで考察することが大切である。特に、多摩川の場合、全国的にも、川の自然環境を守と組みでは先駆的な事例が数多くあるし、その活動が河川行政に大きな影響を与えてきている。ここでは、川と社会との関わりを考察する一助とするための市民活動の歴史を少し振り返ってみることにする。

人間と自然・人間と川

人間の暮らしと文化は、川の流域に芽生え発展した。エジプト文明は、ナイル川流域に、メソポタミヤ文明は、チグリスユーフラテス川流域に、インダス文明はインダス川流域に、黄河文明は、黄河流域にそれぞれ発生し発展した。古代文明がどうして川の流域に発生し発展したのか、それには2つの大きな理由が存在した。一つは、水は人間生活に不可欠であり水を容易に確保できる環境が必要であったこと、二つ目には、人間が生きていく上で必要とする米や麦、雑穀などの食料を生産するための肥沃で豊かな土壌が広がっていたことである。

もちろん、水を確保する場所は、川と限定されてはいない。砂漠においては、オアシスが、山の麓や丘陵地においては湧水が人々に水を供給した。社会が発展し、生産活動が向上すると人々はより一層集団で暮らすようになり、集団が成長すればするほど大量の水を確保できる川の流域の役割は増していった。

高度経済成長と環境

多摩川における市民活動が活発化する時代的背景に、60年代からはじまる高度経済成長と日本社会の大きな構造変化があげられる。日本社会は、高度経済成長とともに人口が農山村から都市に爆発的に集中する。さらに高度経済成長の時期に重化学工業化が進み、鉄鋼、電力、石油化学、自動車など重要産業の分野で目覚ましい技術革新がおこなわれ、集中的な設備投資によって、機械設備や化学装置が整備され、大量生産体制が確立し、アメリカに次ぐ経済大国に成長した。一方、都市化、工業化への急激な変化は、騒音、排気ガス汚染、河川の汚濁などの公害が深刻な社会問題となった。また、人口の増加は、都市郊外の宅地化をもたらし、多摩丘陵の森が年々減少するなど開発によって都市の緑が奪われていくこととなった。こうした自然破壊、環境破壊が公害とともに大

きな社会問題となった。

特に公害は人体を蝕み深刻な健康破壊を作りだし、熊本水俣病事件、新潟水俣病事件、イタイイタイ病事件、四日市ぜんそく事件へと発展し、それぞれは60年代後半に4大公害裁判として法廷で争われることとなった。こうした公害反対運動の高まりや沖縄返還を求める活動など社会運動の進展の中で革新的な美濃部東京都知事が誕生し、福祉と環境保全政策を実行するなどの動きも生まれた。と同時にベトナム戦争に反対し学費値上げに抗議する学生運動も高揚し、多くの若者が社会的な問題に関心を持ち始めた。

多摩川における自然保護運動

高度経済成長政策による開発が進む中、工場排水や家庭排水による河川の汚濁は一段と深刻化する中、環境の分野でも自然保護運動が全国各地で起こりつつあった。その先陣を切ったのは、多摩川における自然保護運動であった。その自然保護運動の中核となったのが「多摩川の自然を守る会」（以下守る会と略す）であった。守る会が発足したのは、今から40年前の昭和45年2月8日。守る会発足のきっかけになったのは、昭和44年11月に福生市が、河川敷に運動場をつくと発表したことであった。よりにもよってその場所が、多摩川本流と秋川の合流地点で河川区域が広く野鳥の渡来地として多摩川流域でも貴重な場所であったことから、日本野鳥の会会員の中からまず抗議の声があがった。その声が大きく拡がり、日本自然保護協会や様々な大学のサークルなどから研究者の若手や学生が集まり、多摩川における自然保護運動を担う多摩川の自然を守る会が誕生した。

守る会の初代代表に就任した市田則孝は、当時のことを次のように述べている。『『自然を守れ！』の声に驚いた市当局は、いち早くブルドーザーで整地だけを行ってしまい、川原は守られなかったのであるが、これをきっかけに、守る会は多摩川流域全体に目を向け、東京都民の身近な自然を守ろうと活動を始めたのである。自然保護が、人間のためを考えるものならば、われわれの日頃の生活環境の中にある自然、身の回りの自然こそいちばん先に守られなければならないと考えてのことであった。』

鳥、植物、昆虫、そして水質など、各方面の若手研究者が集まり、流域の自然環境調査から着手したが、その結果わかったのは、想像以上に破壊され、痛めつけられている多摩川の姿であった。大都市を貫いて流れていながら、さまざまな動物が訪れ、四季おりおりに花の咲き乱れる都市河川は、今まで開発の盲点であり、都市住民の数少ないいいこいの場であった。このいいこいの場を守る―それが多摩川の自然を守る会の目的であった。」

昭和45年3月に守る会は、福生市の多摩川河原で最初の自然観察会を開くほか、4月に自然調査を行った。また、「河川敷の利用は自然の保護を中心に」という要望書を建設省や東京都、流域自治体に提出。折から公害防止、自然保護を求める国民の声が高

まり、5月に行った「自然を返せ」の日比谷デモには、日本野鳥の会創立者の中西梧桐や美濃部亮吉東京都知事ら約130名が参加した。多摩川の自然を守る会では、6月に立川市の多摩川河原で自然観察会を開催、7月には多摩川の自然保護を求める陳情書を再度東京都に提出するなどの活動を続けた。

自然保護運動から新たな運動体への脱皮へ

しかし、当時の自然保護運動は、学者や研究者、自然愛好家等が中心であり、地元の住民の参加も共感も得られてはいなかった。というより、流域の住民にその存在もあまり知られていないのが現状であり、自然保護に熱心な一部の人々の運動であったといえよう。とはいえ、自然保護運動が多摩川の河川敷を舞台に展開された意義は極めて大きい。多摩川が自然保護運動の対象になったと言うことは、それだけ多摩川に守るべき自然が残されていたことを意味するからである。自然らしさ、川らしさが壊されていくことに一番敏感な団体にとって、都市化の嵐のまえにただ指をくわえて傍観することが耐えられなかったのであろう。

市田は、当時の自然保護活動の限界について次のように振り返っている。「初期の多摩川の自然を守る会は、日本野鳥の会や日本自然保護協会会員などとも自然に関心の深い人々を中心となった自然保護のグループであり、環境調査のほか月1回程度の自然観察会を通じて、地元への働きかけを行っているにすぎなかった。

元来、わが国の自然保護運動は、学者中心に進められてきており、幅広い市民の支持と参加によって推進されている現在の欧米の自然保護運動とは、ある意味で異質のものであった。昭和24年に設立された日本自然保護協会の前身も、学術的に貴重な植物を守るためにダム建設に反対した、学者中心のものであった。自然保護の対象となったのは、原生林であり、学術的に重要な動植物のみに限られていたのである。したがって運動も、学術調査とそれに基づく意見書の提出という消極的な形で行われてきた。高度経済成長政策の陰で、自然の破壊は身近なところでも急ピッチで進み、それに気づいて嘆く声はあったが、身近な自然を守れと言う声は起こらなかったのである。

この風潮を一掃して、何とかなるかも知れないという気持ちを持たせたのが、昭和42年に発足した新浜を守る会（代表・蓮尾純子）の動きであった。シギやチドリの渡来地としてわが国最大の、千葉県新浜の干潟が工場用地として埋め立てられることに対する反対運動であった。大学1年の3人の女性が中心になって進められたこの運動は、結果として、埋め立て地の一部を渡り鳥のために残すことに成功し、そのための費用は10億にものぼった。たかが鳥のために、このような措置がとられるというのは、その頃の情勢では全く画期的なことであった。多摩川の場合も、はじめ地元とは全く無関係な存在であった。多摩川の自然を守る会が、地元と交流をもつようになったのは、発足後

半年ほどした45年8月に都の堤防道路計画が発表になったときのことである。守る会も反対し、地元でも反対していることがわかった。お互いに立場や反対の理由は異なっているけれども、目的は一致したのである。こうして、守る会といわゆる地元との提携が始まった。ここで、地元と守る会の橋渡し役になったのが横山理子さんを中心とする人々であった。」

公害反対闘争の高揚、自然保護運動の高まりのなか昭和46年には、環境庁が発足するなど、自然や環境を守る活動に国民の関心が広がり、昭和45年に多摩川ぞい道路建設に反対する会の結成を皮切りに、昭和46年には、多摩川ぞい自動車道路反対都民協議会、秋川の自然と文化を護る会、多摩住宅くさぶえの会、昭和47年には、府中の自然を守る会、三多摩問題調査研究会、奥多摩の自然と民家を守る会、日野の自然を守る会、多摩川上流の自然を守る会など住民の組織が流域各地に生まれた。

住民運動としての自然保護運動へ

多摩川における自然保護運動の転機が訪れた。それは、野鳥の会や自然愛好家、若い研究者、学生のサークルなどが主力であった守る会に横山理子ら住民運動のリーダーが加わり、幅広い様々な分野の住民が参加する自然保護運動に発展したからである。特に横山理子が多摩川ぞい自動車道路反対運動に参加した経過や守る会への参加と活動の新たな広がり、新しい自然保護団体の結成（多摩川水系自然保護団体協議会）、多摩川河川環境管理計画策定に向けた住民と東京都及び建設省京浜工事事務所（当時）との現地踏査などの取り組みが精力的に展開された。当時のいきさつを新多摩川誌は次のように述べている。

「狛江市の多摩川ぞいに住む主婦の横山理子は、1970年（昭和45）夏のある日、自宅の前の堤防で突然草刈り機の音がするのを聞き、驚いて外に飛び出し、そこで初めて東京都建設局が多摩川左岸ぞいに、自動車道路を建設する計画をもっていることを知った。道路公害を心配した横山理子はさっそく近隣の住民に呼びかけ、対策を話し合った。9月8日、近隣住民が横山家に集まり、道路建設に反対する会結成の必要性を確認し、9月20日に多摩川ぞい道路建設に反対する会を結成した。東京都知事や狛江町議会に陳情書や請願書を提出するとともに「多摩川を救え」住民大会を開催、チラシ8000枚を市内に配布するなど活発な運動を展開した。

横山たち狛江住民の一部は、さらにくわしく多摩川のことを知ろうとして、多摩川の自然を守る会に入会した。その結果、前述のように、多摩川の自然を守る会は住民運動としての特色をもった自然保護運動を展開することとなった。会では、堤防上の草刈り中止を求めて、10月に建設省関東地方建設局京浜工事事務所に要望書を提出。また12月には、歩行者に危険な調布・狛江地区多摩川堤防上サイクリングコース建設反対の運動を開始、この建設計画は翌年2月に東京都の年度計画から除外されることとなった。

1971年（昭和46）3月8日、多摩川ぞい自動車道路反対都民協議会結成、堤防道路反対の請願が狛江市議会で採択された。左岸道路問題は、住民の反対運動が高まって羽田から立川までという東京都の経過右派中止となったが、小田急線によって町が二分されている狛江市内の交通渋滞解消のためとして、問題は解決していなかった。この問題は1972年（昭和47）12月6日の沿岸住民による車輛通行阻止の座り込みにまで発展した。狛江市長との度重なる対話集会や市議会への請願書の提出、河川管理者である建設省関東地方建設局京浜工事事務所への要望などが行われ、1973年（昭和48）2月には多摩川ぞい五本松地域天端小段の自動車通過道路反対の署名が17000名分集められた。

多摩川水系自然保護団体協議会の結成

多摩川では新しい自然保護団体が結成された。1972年（昭和47年）11月、都内の自然保護団体が集まり、第1回自然保護団体のつどいが新宿消費者センターで開かれた。そこでは主に奥多摩の天祖山における石灰岩採掘や東京都自然環境保全審議会の活動について話し合われた。翌年2月に第2回、3月に第3回の集いが開かれ、さらに6月東京の自然を考える集い、10月東京自然保護団体協議会集会と続き、1974年（昭和49）5月25日には多摩川をめぐる自然保護住民運動団体のつどい準備会が開催された。6月15日多摩川をめぐる自然保護のつどい、6月23日多摩川水系を巡る市民集会（三多摩問題調査研究会主催）などによって連合を求める機運がさらに高まり、同年12月14日、ようやく多摩川水系自然保護団体協議会が結成されることとなった。結成集会アピールには、次のように書かれている。

私たち多摩川をめぐる自然保護団体は、これまでたがいに連絡を取りながら、数回にわたる集会を持ち、各団体の活動の紹介や問題提起を行うなどの交流を重ねてきました。そして去る6月15日、立川で行われた「多摩川をめぐる自然保護住民運動団体のつどい」では、自主的な組織、協議会をつくらうという要望が強く出されるに至りました。

同じ多摩川をめぐる自然保護団体といっても、運動の目的や方法は違ってきます。しかし、一様に叫ばれているのは、著しい自然破壊の現状をどう食い止めるかということです。

私たちは今後さらに活発に交流を続け、経験や知識、情報を交換し、手を取り合って、広い視野に立った自然保護運動を推進するために、今日ここに多摩川水系自然保護団体協議会を結成するものです。

結成集会にあたり、私たちは次のことを訴えます。

- 一、 八王子周辺の自然を破壊する大学校舎、ゴルフ場建設反対
- 一、 八王子、五日市、青梅で大規模に行われている丘陵爆破採石事業を2～3年計画で段階的に縮小させ、数年後には完全に中止せよ

- 一、 五日市町の町有地採石場化反対
- 一、 天祖山の破壊を即時中止せよー森林法違反、第2次しんせいを許すな
- 一、 秋川、日原川ダム建設計画反対
- 一、 尾根幹線（環状9号線）を阻止して多摩の美しい丘陵を守れ
- 一、 日野駅西側の雑木林とカタクリの保存を実現せよ
- 一、 日の緑地の買収を実現せよ
- 一、 多摩の段丘崖を守れ
- 一、 立川段丘崖並びに周辺の樹木等の保全保護を
- 一、 矢川湧水池および根川水系の保全保護を
- 一、 生産緑地の確保、中小河川の重金属汚染対策を
- 一、 多摩地区の中小河川の自然保護対策を
- 一、 流域下水道について、市民に情報を公開せよ
- 一、 多摩川水系の開発状況を公開せよ
- 一、 地下水の涵養のため、基地等を涵養樹林地帯または湧水池にせよ
- 一、 暗きょ化またはコンクリート化による河川改修を再検討せよ
- 一、 多摩川河川敷の畑を禁止せよー積極的な対策を
- 一、 多摩川ぞい自動車道路反対
- 一、 合成洗剤を止めよう、いい水質で住民の健康、子孫の体を守ろう。生態に合う川にしよう。
- 一、 多摩川の浄化を徹底せよ
- 一、 荒川下流の葦原を守り、野鳥の楽園をつくろう
- 一、 都の方々とたびたび話し合しましょう

加盟団体（五十音図）

尾根幹線を阻止して多摩の生活と自然を守る会、三多摩問題調査研究会、立川公害をなくす会、多摩川住宅くさぶえ会、多摩川上流の自然を守る会、多摩川沿い自動車道路反対都民協議会、多摩川の自然を取り戻す会、多摩川の自然を守る会、八王子自然友の会、八王子自然保護連絡協議会、（奥多摩植物調査会、丘陵文化の会、多摩史研究会、多摩社旗問題研究会、ダンプ公害から子どもを守る会、都市問題研究会、八王子自然友の会）、羽村草花自然公園緑を守る会、日野の自然を守る会、オブザーバー団体：荒川下流の自然を考える会

多摩川河川環境管理計画策定に向けて

結成されたばかりの多摩川水系自然保護団体協議会が、最初に取り組んだ問題は、東京都自然保護条例に基づいて多摩川を自然環境保全地域に指定させるということだった。1975年（昭和50年）2月22日に最初の会合を開き、3月28日に東京都公

害局自然保護部に話をもっていった。都自然保護部はこの提案を好意的に受け取り、4月21日から5月9日まで6回に分けて、丸子橋から青梅万年橋までの多摩川を自然保護団体と共に現地視察した。同年11月8日に多摩川流域の自然環境保全地域指定を進める実行委員会を設け、76年春までに都の職員と同じテーブルに着き、地図を広げながら計画について何度も話し合った。この指定を求める運動は、その後都知事の交代に伴って都側の熱意が冷める一方で、多摩川が建設省による直轄河川であり、その建設省が新たに河川環境管理計画を策定することが分かり、方向転換を迫られることになった。

記録によると、1977年（昭和52）9月13日に多摩川の保全地域指定について東京都自然保護部と協議したのが最後で、その後はもっぱら建設省関東地方建設局京浜工事事務所が話し合いの相手となったことがわかる。

建設省関東地方建設局京浜工事事務所と自然保護団体との話し合いの場は、すでに1973年（昭和48）5月に都市河川整備事業の説明を聞くため、中村副所長を招いて講演会を開いたときから始まっている。そしてその後は所長が替わるたびに講演会を兼ねて、流域自然保護団体ならびに住民との話し合い会が行われている。すなわち1975年6月20日に、狛江市福祉会館近藤徹所長を招いたのをはじめとして、1979年（昭和54）12月、83年（昭和58）2月、86年（昭和61）3月等々と続けられている。

建設省と流域住民との活発な話し合いが行われた一つのピークは、多摩川河川環境管理計画の策定に見られる。この計画は、正式には学識経験者や行政の長など専門の委員会で審議・決定されたが、その過程で流域住民や自然保護団体への説明会や意見交換会が何度も開かれた。1978年（昭和53）11月一日、8日、15日、22日の4日間で、建設省の直轄区間である青梅の万年橋から河口まで岩井国臣京浜工事事務所長を始め、事務所職員、東京都自然保護部職員、自然保護団体の三者共同で現地踏査をし、同年12月16日に狛江市福祉会館にて合同検討会を行った。

計画の細かな線引きについても、1979年（昭和54）6月16日と20日に同じく狛江市福祉会館で建設省と東京都と自然保護団体の三者同席による意見交換会が開かれ、たとえば、関戸橋周辺は希少種のカワラエンマコオロギが棲息しているので、自然度の高い利用区分に変更して欲しい、府中市の礫間浄化実験場付近のランク付けは実情に合っているだろうか、等々の細かな協議が熱心に行われた。こうして同年11月18日、開催の多摩川河川環境管理計画検討会（於狛江市福祉会館）で、建設省の原案が最終的に確認され、翌年3月、この計画は全国に先駆けて制定された。」

「横山理子」を歴史の中で学ぶこと

多摩川の自然保護運動が開始されて今年（平成22年）でちょうど40周年を迎える。昭和45年2月8日に多摩川の自然を守る会が発足し、昭和48年に「東京における自

然の保護と回復に関する条例」（東京都自然保護条例）が制定され、昭和49年には、「多摩川水系自然保護団体協議会」が結成された。昭和55年には、多摩川の自然を守る会など自然保護団体と東京都、河川管理者とによる合意として全国初の河川環境管理計画が策定された。昭和59年には市民投票による「多摩川八景」が選定され、平成6年には多摩地域を中心とした市民の活動拠点「みずとみどり研究会」や「多摩川センター」が設立された。平成9年には、多摩川市民フォーラム設立し「河川環境の整備と保全」を盛り込んだ河川法の改正が実施された。平成10年には多摩川を多くの人々と育むための新たな仕組みとなる多摩川流域懇談会が発足、平成13年にパートナーシップによるいい川づくりの成果である多摩川水系河川整備計画が策定された。

多摩川における市民運動の特徴は何かを考えた時に、多摩川の自然を守る会が発足して先駆的な自然保護運動が開始された昭和45年から、「人と川のよりよい関係」をテーマにした3つの基本方針（1、多摩川と市民とのふれあいの場を提供する、2、多摩川らしさを維持する。3、多摩川らしさを活用する）を確立した昭和55年の「多摩川河川環境管理計画」策定までの10年間の活動が、多摩川の市民運動の基本方向を定めた極めて重要な時期であったといえる。全国のパートナーシップによるいい川づくりを指導する山道省三は、「いい川にはいい人がいる」との名言を述べているが、まさに多摩川でもその通りの事実が展開したといえる。その中心人物が横山理子である。

横山理子は、昭和2年長野県青木村で生まれ、長野師範学校を卒業後、小学校教諭を7年間務め、横山十四男と結婚、当初大田区、後に狛江に住む。主婦、母として子育てに専念した後、昭和40年頃から近所の小学生相手に学習塾を経営。昭和45年9月多摩川沿い自動車道路建設に反対する運動に参加、同時に多摩川の自然を守る会に参加。狛江市環境保全市民委員、東京都自然環境保全審議会委員を務める。昭和49年、台風16号によって多摩川堤防が決壊、家屋家財すべてを流失。翌年元の場所に家を再建。昭和52年、多摩川の自然を守る会の代表に就任。昭和60年、虎ノ門病院に入院。昭和61年、念願の多摩川の源流水干に登る。昭和63年4月12日、狛江市長と会談、多摩川の自然保護の必要性を説き要望書を渡す。4月20日、死去。原因、白血病、肺炎、心不全。享年60歳。

横山理子が活躍した時代は、いまから20年以上も前のことであり、その存在と名前も徐々に忘れられつつある。しかし、人間には忘れてもいいことと忘れてはならないことの二つがある。横山理子に関しては決して忘れてはならない人物である。忘れてはならない人物であるばかりか、もっと人なりと実績を研究し再認識、再評価し、次の時代に伝えていかなければならない。なぜなら、横山理子の活躍なくして多摩川の市民運動の発展はなかったといえるし、横山理子の築いた運動こそ、多摩川の市民運動の原点であるからだ。横山理子は、多摩川の市民運動の母であり、太陽である。教育者であった理子は、子供たちをこよなく愛した。と同時に多摩川へも無償の愛を捧げた。横山理子ほどの情熱と行動力でもって、多摩川と向かい合った人は他に知らない。時代が横山理

子を求めたのであり、横山理子はその時代の求めに答えたのである。

与えられた短時間の研究で横山理子の全体像を描き出すこともできないし、多摩川の自然を守る会発足から多摩川河川環境管理計画策定までの10年間の運動の成果に関する調査、分析、評価も完璧にはできないであろう。しかし、今私は多摩川流域ネットワークの代表を務め、多摩川全体の市民運動の中心に位置している中、多摩川の市民運動の特色は何か、どんな歴史があり、どんな経験の中から何が生み出されてきたのかという運動の基本ライン、基本方向がつかめた気がする。

この「多摩川市民運動の母・横山理子物語」の節では、できるだけ当時の本人たちの口から、ことの真相を語ってもらうやり方で物語を進めようと考えている。

ここでは、横山理子がまず横山理子が多摩川沿い自動車道路反対運動への参加と多摩川の自然を守る会への参加とその活動の様子を紹介する。

6) 検討会を重ねて事業を伸展させたい

この取り組みでは、高橋先生、宮川先生、新藤先生に検討会に加わっていただき、多くの助言を頂いている。始まったばかりの取り組みではあるが、まだまだ試行錯誤の連続であるが、母なる川多摩川の自然環境をより良好に保ち、次の世代に継承したい、源流と流域との連携を深めたい、もっともっと流域市民と多摩川との関係を近いものにしたいたいと願い、国土地図の方々の智慧をお借りしながらこの事業を進めている。

都市河川の中であって、多摩川ほど、これほどの自然が保たれ、しかも流域市民から愛されている川は少ないと思う。ただ、多摩川源流域の社会経済環境は、年々厳しさを増している。水や森林こそ、持続可能な循環型社会構築の基盤でありながら正当な評価がなされない現状にいささか腹立たしい思いをしているが、泣き言からは、事業の発展は望めないと思い、コツコツと源流資源調査に取り組み、その価値と可能性の探究に全精力をつぎ込んでいる。3.11と言う大震災が起こり、復興支援が必死に努力されているが、一方で新しい日本のあり方が模索されている。清らかな水と豊かな森林に恵まれている源流。その源流が大切にされ、源流に新しい光が注がれ、源流新時代がやがて訪れると確信しながら、この事業に取り組みたいと決意している。とうきゅう環境財団の支援に心から感謝している。

多摩川流域環境保全データベース検証用 WebGis 構築に関する調査研究

(研究助成・学術研究VOL. 40—NO. 298)

著 者 宮林 茂幸

発行日 2011年12月1日

発行者 公益財団法人とうきゅう環境財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

<http://www.tokyuenv.or.jp/>